

**入善町じょうべのま遺跡
予備調査概要(4)**

1981年3月

入善町教育委員会

発刊にあたって

じょうべのま遺跡については、これまでに文化庁、奈良国立文化財研究所をはじめ、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センター、並びに地元関係者の絶大なるご指導とご協力を得て、昭和45年6月から数次にわたる範囲確認の発掘調査を行なっており、昭和45年12月19日遺跡の一部が県指定の史跡（3,465m²）となり、さらに昭和54年5月14日国指定の史跡（15,910.29m²）として保存することができました。今回までの調査では、奈良時代末から平安時代前期に属する役所風の遺構群が発見され、きわめて貴重な莊園莊家遺跡の可能性をもつと云われています。今回の調査は、建設省の直轄海岸保全事業として副堤整備計画が策定されたため、これに先立ち、富山県埋蔵文化財センターの指導のもと、指定地に隣接する北部地帯C・K地区（調査概要(2)～(3)参照）の試掘を実施したものであります。この結果、多数の出土品及び遺構が確認されたため、昭和56年度に富山県埋蔵文化財センターの指導を得て、記録保存調査を実施する予定であります。今後、この遺跡の保存については、遺跡公園化し、永く後世に引き継ぎたいと思料している次第であります。

今回の発掘調査にあたり、協力いただいた関係各位に対しては、心から謝意を申しあげます。

富山県入善町教育委員会

教育長 森 栄

目 次

発刊にあたって	
例 言	
I 総論と調査の目的.....	1
第1図 地形及び区割図.....	1
第2図 発掘区配図.....	2
II C地区の概要.....	2
第3図 遺構配置図.....	3
III K地区の概要.....	5
第4図 K地区出土の土師器.....	5
IV まとめ.....	6
参考文献.....	6
写真図版.....	6

例 言

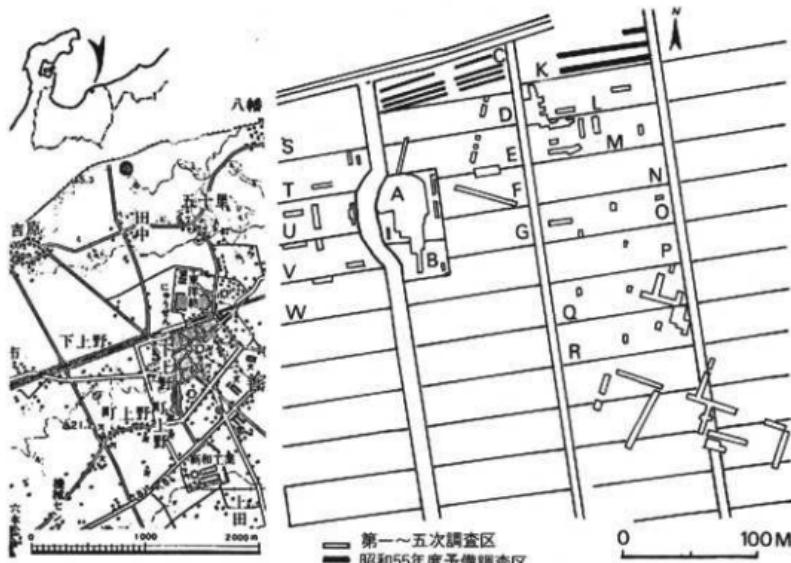
1. 本書は入善町じょうべのま遺跡内における海岸施設並びに鶴巣移転予定区域の手掘調査の概要である。
2. 譲工事区間に關しては建設省北陸地方建設局の委託を受け、鶴巣移転区域に關しては昭和55年度国庫補助金の交付を得て入善町教育委員会が主導し、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣をうけて実施された。
3. 調査は昭和55年10月16日から11月10日まで行なわれた。
4. 事務局は入善町教育委員会におき、庶務は課員の協力を擧げ社会教育課係長上田典博が担当し、課長右井正雄が総括した。
5. 調査参加者は次のとおりである。富山県埋蔵文化財センター神保孝造・奥村吉信（以上調査担当者）、田中久樂・田中三正・久郷常平・田中静子・田中正子・竹島ハサ・竹島タカ・宮スイ・室セツ子・東フサ・込尾寿子・飛田みつま・島明子・坂東房子・古島澄子・宮本恵美子・相原信子・西尾カオル・鈴木タカ子（以上調査作業員）
6. 調査期間中、富山考古学会を員の青崎久雄氏に指導と助言をいただいた。また、地元田中久樂氏には連絡所及び飲料水の提供をうけた。記して謝意を申し述べる。
7. 本書に掲載した実測図は奥村が作製し、遺物写真は橋本正泰（富山県埋蔵文化財センター）が撮出した。
8. 本書の編集・執筆は、所員の助言・協力をうけ、神保・奥村が担当した。遺物に關しては、橋本正泰より教示を仰いた。

I 経緯と調査の目的

じょうべのま遺跡は、昭和16年に柱根が発見されたことから注目されるところとなる。昭和45年に当区域の土地改良事業が施行されることになったため、地元有志の働き掛けがあり、町教育委員会と県教育委員会によって、当遺跡の調査計画が企画されたのである。それ以後、延べ五次に及ぶ発掘調査が実施された。その結果、遺跡の重要性が実証され、具体的な処置として、用水路の迂回や遺跡の中心部を工事区域から除いて、その土地の公有化がなされ、今日に及んでいる。

五次にわたって実施された調査の成果は、既に公表されている〔高島他1972、高島他1973・74、橋本他1975〕。A地区には奈良時代末から平安時代前半にかけての莊園莊家風の建物群があり、L地区には鎌倉時代前半の建物群が存在する。A地区的建物群は、主殿風の建物とその付属建物より構成され、六期にわたって建てかえが行なわれている。第五次調査では、U地区で新たに倉庫とみられる建物が検出され、A地区的建物に付随することもわかった。遺物では、墨書き土器や木簡などが注目され、これらは遺跡の性格を推考するうえで重要な意味をもつ。

今回の対象区はC・K地区である。C地区的調査は、副堤建設工事に先立つ調査であるが、同様の契機・目的で、S地区的調査が、昭和52年と53年に行なわれている〔岸本1977・78〕。K地区的調査は、鶴舎移転のための事前調査である。



第1図 地形及び区割図

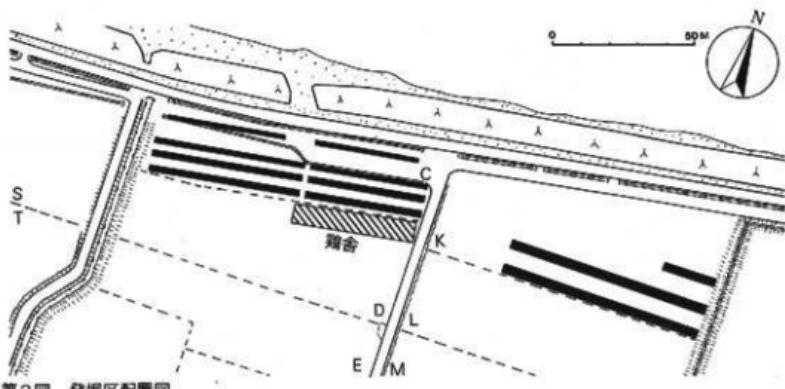
II C地区の概要

C地区の調査期間は、昭和55年10月28日から11月10日までの延べ八日間である。現状は、同地区的西側半分が水田であり、東側半分が鶏舎の跡地である。C地区の西側に位置するS地区は、昭和52・53年度の二ヶ年にわたって事前調査をし、遺跡が広がっていないことを確認している。

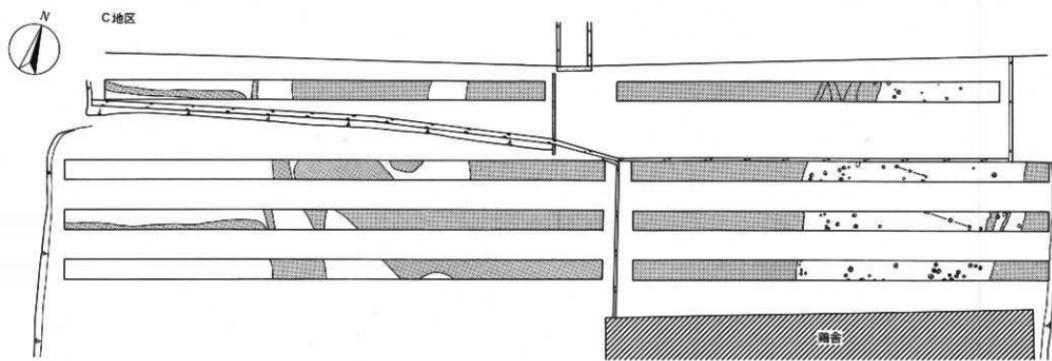
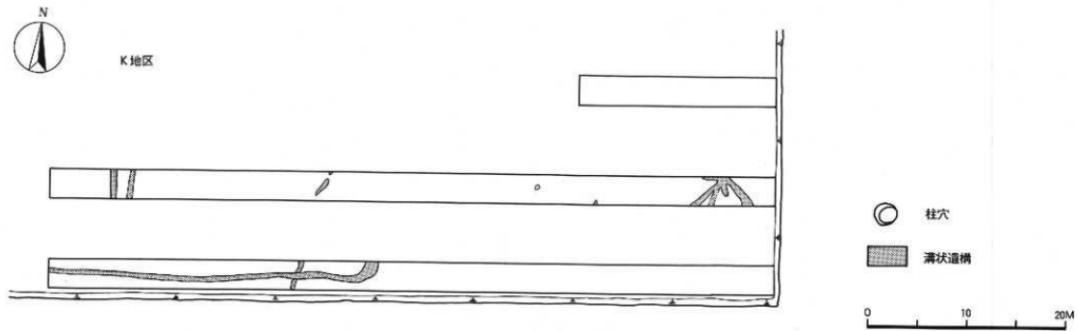
今回の調査は、東西方向に幅2m、長さ約100mのトレンチ三本と、幅2m、長さ約90mのトレンチ一本をそれぞれ3~5m間隔に設けて実施し、遺構・遺物の有無を確認した（第2図）。表土直下は厚さ約30cmの盛土となっていた。出土遺物の大半は、この盛土に含まれており、それを取り除いて黄褐色砂質土の地山面をだし、遺構の確認を行なった。

出土遺物は（図版第2の1）、奈良時代末から平安時代のものと、平安時代末から鎌倉時代のものに分けることができる。前者には土師器片と須恵器片がある。土師器には甕があり、須恵器には杯（高台のつくものが一例ある）・蓋・甕がある。また、杯蓋碗の破片が一点出土している。後者には、珠洲片、瀬戸片、青・白磁片、土師質土器片がある。珠洲は甕と擂鉢で、擂鉢には卸目のつくものとつかないもののがみられる。さらに、鉢の内面に漆がまばらに付着しているものもある。瀬戸は碗で、土師質土器は皿である。青磁は、ヘラ彫りによる文様が内面に施され、全て碗の形状をとる。中国からの輸入品で、同安窯系の製品と考えられる。また、青白磁の合子が一点出土しており、景德鎮窯の製品であると考える。

検出した遺構は、溝状構造と柱穴群である（第3図）。さらに、発掘区の中央に幅約40mの旧河川と考えられる大きな落ちこみを確認した。最も南側のトレンチで、河川内の覆土を約1m掘り下げてみたところ、須恵器片、土師器片、土師質土器片、珠洲片が出土し、遺物の遺存状況の良好な包含層が1m以上の厚さで堆積していることを確認した。これまでの調査で、A区の北側に渦、東側に河川状の落ちこみが確認されており（橋本他1975）、いずれかと連結するものと思



第2図 発掘区配置図



第3図 造構配置図

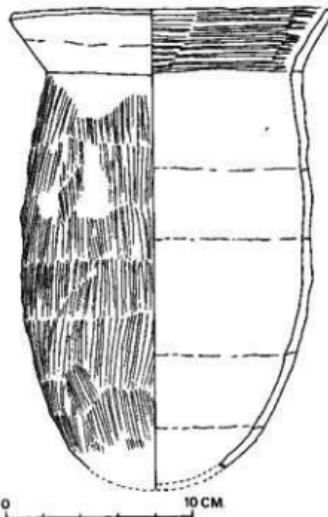
われる。溝状造構は、この旧河川を挟んで東西に位置し、南北に流れるもの四本と東西に流れるもの二本であった。柱穴群は、旧河川の東側で確認でき、数棟の建物が存在すると考えられる。溝及び柱穴は未発掘であり、所属時代と性格については、じゅうぶんに触れることはできないが、近くのL地区には鎌倉時代前半の遺構群があり、これらとの関係が考えられよう。

III K 地区の概要

K地区の調査期間は、昭和55年10月16日より10月24日までの延べ六日間である。現状は水田である。調査は、東西方向に幅3m、長さ70mのトレンチ二本と、幅3m、長さ20mのトレンチ一本を5m間隔に設定して行なった(第2図)。C地区と同様、K地区においても遺物包含層は削平されており、表土直下が盛土となっていた。この盛土を掘り下げて黄褐色砂質土の地山面をだし、遺構の確認を行なった。

出土遺物は(図版第2の4)、古墳時代後半から近世に及んでいる。古墳時代後半の土師器長甕(第4図、図版第2の6)は、胴部外面と口縁部内面に刷毛目調整が施されている。地山に器体のほぼ半分がもぐりこんだ状況で出土した。じょうべのま跡で最も年代を遡る資料である。奈良時代末から平安時代にかけての遺物には、土師器と須恵器の細片がある。土師器は甕で、須恵器は甕と双耳瓶である。平安時代末から鎌倉時代にかけての遺物には、珠洲片、瀬戸片、青・白磁片、土師質土器片がある。珠洲には甕・壺・鉢がある。鉢は擂鉢で、卸目のつくものとつかないものが存在する。瀬戸では皿・碗・壺が確認できる。青磁片は大半が碗である。中国からの輸入磁器で、龍泉窯・同安窯系の製品と考えられる。土師質土器は皿である。近世の遺物として、越中瀬戸の皿と錘がある。また、珠洲に似てはいるが、胎土・成形のうえで異なる一群の中世陶器が数片存在している。その他に金属製品がある。銅製の円盤で、直径が約10cmである(図版第2の5)。一端に小さな円孔が二個ついている。これは、鎌倉時代から南北朝時代にかけての懸仏の銅円盤と考えられる。当遺跡A・B地区の性格は寺院に関係したものであるという見解があり[橋本1975]、懸仏は寺社にかかわりをもつものである。L地区を中心とする遺構の性格を考えるうえで、重要な位置をもつかも知れない。

確認した遺構は、幅30~40cmの溝状造構六本であり、南北方向に走るもの五本と東西方向に走る



第4図 K地区出土の土師器

もの一本であった（第3図）。ほかに、柱穴一個を確認した。いずれも地山面がかなり削平されていたため、遺存状況は悪い。

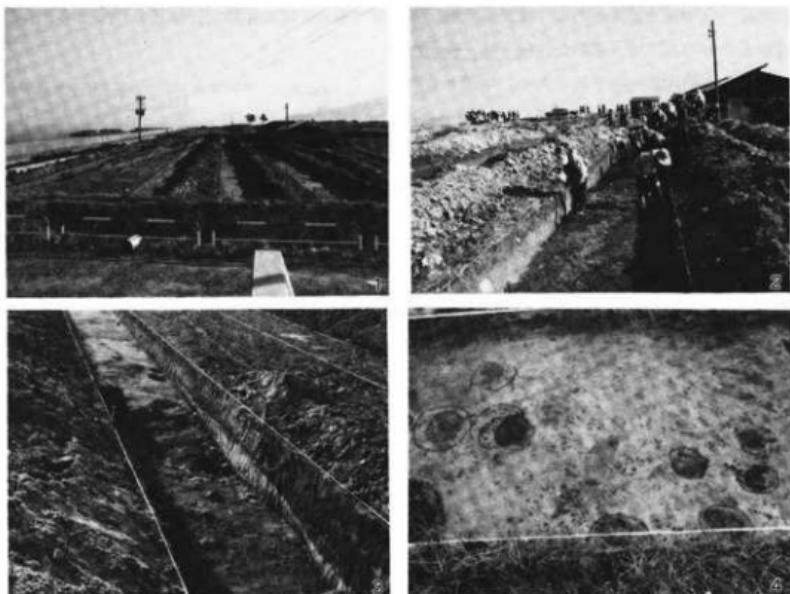
所属時代と性格は未だにつき不明であるが、出土遺物から、C地区と同様に、L地区とのつながりが考えられよう。

IVまとめ

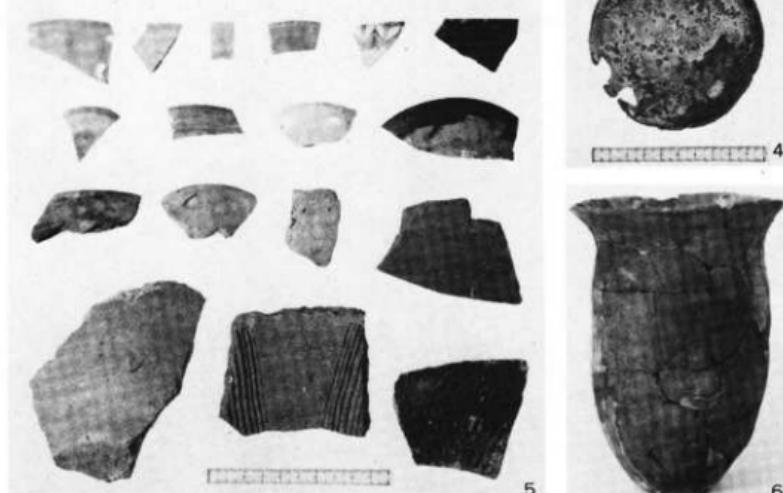
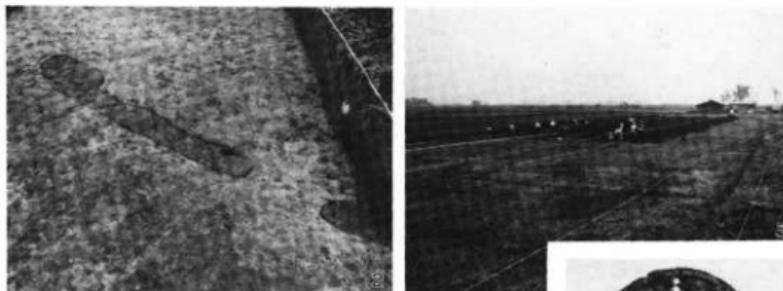
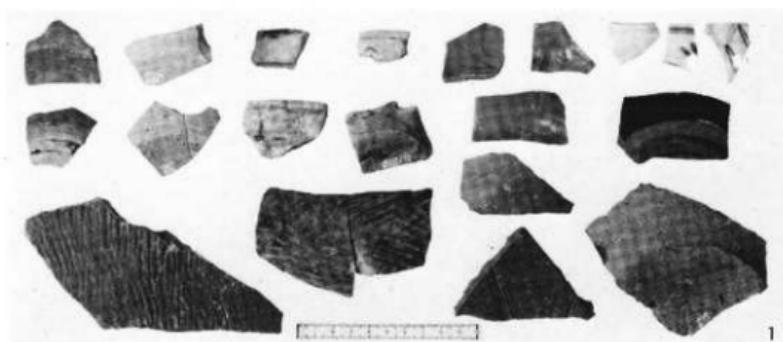
1. 今回の調査で、じょうべのま遺跡の広がりは、C・K地区まで及ぶことが確認された。
2. C地区では、奈良時代末～鎌倉時代の遺物と溝状遺構・柱穴群が確認された。さらに、当区の中央に幅40mの旧河川が存在した。旧河川内の遺物包含層と遺構の遺存状況は良好であった。
3. K地区では、古墳時代後半～近世の遺物と溝状遺構・柱穴が確認された。古墳時代後半の土師器長甕は、当遺跡で最も古く遡る資料である。
4. C・K地区はL地区に隣接しており、時期的なつながりが考えられ、今後の調査が期待される。

参考文献

- キ 岸本雅敏1977「じょうべのま遺跡」『昭和52年度富山県埋蔵文化財調査一覧』富山県教育委員会
岸本雅敏1978「じょうべのま遺跡」『昭和53年度富山県埋蔵文化財調査一覧』富山県教育委員会
タ 高島忠平1972「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報」入善町教育委員会
高島忠平・橋本正・舟崎久雄1973「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報(2)」富山県教育委員会
高島忠平・橋本正・舟崎久雄1974「じょうべのま遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』富山県教育委員会
ハ 橋本正・岸本雅敏1975「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)」入善町教育委員会



図版第1 C地区 1.全景 2.作業風景 3.旧河川 4.柱穴



圖版第2 C地區 1.出土遺物
K地區 2.溝狀構造 3.作業風景 4.出土遺物 5.銅圓盤 6.土師器長壺

入善町じょうべのま遺跡
予備調査概要(4)

発行日 昭和 56 年 3 月
発行者 入善町教育委員会
編集者 神保孝達・奥村吉信
印刷所 海日本印刷